

お盆のお参りについて

今年も、皆さまのご自宅へお参りに伺います。下記の日程で伺いますので、早めにご予約くださいませ。よろしくお願ひします。

8月7日(火)～12日(日)

ご希望の日時に伺いますので、あらかじめ電話にてご予約ください。(32-3614)

8月13日(月)～15日(水)

地域ごとのお参りとなります。天候等の諸事情による変更が生じるため、日時のご指定はできませんので、ご了承ください。

なお、16日以降であれば、ご予約いただけます。

※国府・古川地域は、11日(土)午前中に伺います。

※一之宮・久々野方面は、12日(日)午前中に伺います。

※初盆のご家庭(昨年8月中旬以降に、ご家族を亡くされたご家庭)は、13日(月)午前中に伺います。

※8月の、月命日のお参りはお休みとなりますので、ご了承ください。(祥月ご命日・法要等の場合は、

別途ご連絡いただければ、お参りに伺います。)



カラー版神通寺報はこちらから！→

JINZUJI

神通寺報

第296号

(2018年7月号)

〒506-0021

高山市名田町5-30

明林山神通寺

住職 朝戸 臣統

0577-32-3614 (TEL/FAX)

asato@jinzuji.com

www.jinzuji.com

神通寺報 配布スタッフの皆様(敬称略)

不破 朝子・三枝 勝・黒田 はな・中垣 久美子・中澤 一弘・塚本 清洋・永富 登代子・石垣 美代子・洞口 義武・松尾 衿子・片岡 節子・畠山 正一・松本文男・阿多野 正昭・柴田 和子・安藤 礼子・成畑 瑛子・大萱 勝・谷口 忠雄・若田 義隆・千原 繁・原田 尚子・大村 和弘・中田 敬三・野村 洋子・吉本 敏彦

報恩の念仏

「朝戸さんにとって、ご法話って、何なのでしょうか？」

中学生向けご法話の資料作成のため、色々インタビューを受けた中で、そう聞かれました。私自身、毎月の定例法座でご法話をしています。が、あらたまつて唐突に聞かれると、すぐに答えられずにアタフタしてしまいます。

でも、とても大切な問いですよ。自分自身とみ教えとのあいについて、振り返る機会をいただきました。

ご法話とは、「仏徳讃嘆」であり、阿弥陀様のお慈悲のぬくもりを褒め称えることです。「お取り次ぎ」ともいい、阿弥陀様の代弁者という立場でお話しします。

では、なぜ私がご門徒さんの前でご法話をするようになったのだろうかと振り返ってみると、私自身の仏教との向き合い方が転じられていったことが、今の私に大き

「拝読 浄土真宗のみ教え」より。

報恩の念仏

阿弥陀如来は、迷いのなかにある私たちを哀れみ悲しまれ、そのままに救いどるとはたらかれている。浄土真宗の救いは、この如来のはたらきを信じる心一つで定まり、念仏は救われたよこびが声となってあらわれ出たものである。

親鸞聖人は仰せになる。

ただよくつねに如来の号を称して

大悲弘誓の恩を報ずべしといへり

如来は私たちを救い、見返りを求めることがない。はかりしない如来のご恩は、決して返すことのできない大いなる恵みである。私たちは、ただそのご恩をよろこび、感謝の思いを念仏の声にあらわすばかりである。これを報恩の念仏という。

救いのよろこびを恵まれた者は、報恩の思いから、つねに阿弥陀如来と念仏申すべきである。

く影響しているように思います。

それは、「生きる糧」としての「念仏」から、「生きるよりどころとしての念仏」への転換でありました。

☆☆☆☆☆☆☆☆

十八歳の時、私が大学で仏教の学びをしようと思つたのは、得度して、お寺へ帰つてから「経済的に自立するため」に、おつとめ、作法、教義について学ぼうとしていました。

毎月のお参り、年回法要、葬儀という関わりの中で、御布施をいただきながら、ご門徒さんと上手に「お付き合い」していくことが大切だ、と考えていました。

つまり、「生きる糧、お付き合いとしての念仏」という向き合い方をしていたのでした。

しかし、大学であった恩師は、そのような私とは全

く違うスタンスで、仏教に向き合っておられました。それは、自分自身の生き方そのものを、仏教に問い、お念仏に問いながら、み教えに向き合っておられる姿でした。恩師が教えてくださったのは、仏さまのお慈悲を心から喜び、苦悩の人生を乗り越えながら歩んでいくことのできる仏教であり、お念仏の日暮らしであったのです。これが、「生きるよりどころとしての仏教」ということです。

そのようなであいの中でいただいたみ教えの尊さ、ありがたさを、共によるこび、共に歩んでいきたいという願いの中で、仏徳讃嘆をしていくのが、私にとつてのこの法話です。

お寺も、み教えも、そのありがたさ、尊さが伝わるのは、その喜びを伝えたい、知って欲しい、その思いがあればこそ、伝わると思うのです。

☆☆☆☆☆☆

お念仏のありがたさ、尊さは、お聴聞くださった皆さんがご法義の味わいを喜ばれることよって弘まります。でも実は、お念仏そのものに、ご法義が弘まっっていくはたらきが備わっているのです。



正信偈を唱和する、ご門徒の皆さん。

私は先輩から、そのことを「ソバ屋の繁盛」という喩えで聞かせていただきました。

美味しいソバ屋さんが繁盛するのはなぜでしょう。それは、ソバを食べたお客さんが「このソバは本当に美味しい。また食べに行きたい！」という一言、口コミが、次々にお客さん呼び、お店が繁盛するのですね。

でも実は、その根底にあるのは、店主によって仕上げられたソバの味がホンモノである、ということでしょう。吟味された材料と卓越した腕前によって出来上がった美味しいソバによって、お客さんが「美味しい！」という声を上げずにはおれないのです。その声が伝わって、ソ

バ屋は繁盛するのですね。

同時に、どんなに評判が良くても、お客である私自身が食べなければ、その味はわかりません。実際に食べて味わい、「ああ、美味しかった！」という実感が、本人の喜びとなり、また味わいたい、周りに伝えたいという原動力となっていくのでしよう。

☆☆☆☆☆☆

親鸞聖人は、「正信偈」の中で、

冷やし中華そばをいただきながら、歓談のひとつとき。

ただよくつねに如来の号を称して、大悲弘誓の恩を報ずべしといへり。

と示されます。

必ず救う。我にまかせよ。

全てのいのちを救いたいと願われた、阿弥陀様の
の大きいなるお慈悲が、南無阿弥陀仏のお名号と仕
上がって下さいました。

私であった恩師の先生は、そのようなお慈悲
のぬくもりを人生のよりどころとされ、南無阿弥
陀仏、南無阿弥陀仏と、お念仏申す人生を歩まれました。

どんなにつらいことや悲しいことがあっても、私の人
生を決してむなしく終わらせないと、願いつけて下さる
はたらきがあるのですよ。だから、お念仏申しながら、
尊い人生を歩んでいけるのですよ。

そのありがたさ、尊さを、お念仏申しながら、私に伝
えてくださったのです。

私は、恩師の導きとお育てをいただき、阿弥陀様
のお慈悲のご恩に感謝の思いを込めながら、南無阿
弥陀仏とお念仏申すのです。それを、「報恩の念仏」
であると聞かせていただきます。



☆☆☆☆☆☆☆☆

これを読んでくださっている方の中には、
お寺との「お付き合い」で良いのだと思わ
れる方もおられるでしょう。「お寺には、ご
法事や葬儀、お盆参りの時だけお世話にな
れば良い。」というのも、ひとつのご縁では
ありますが、それだけではお念仏のお心を
味わったことにはならないと思うのです。

でも、決してむなし人生では終わらせないよ。

必ず救う。我にまかせよ。

そのお慈悲をよろこび、感謝の思いでお念仏申す人生
が、私には開かれてありました。私はそのありがたさ、
尊さを、恩師の生き様から聞かせていただいたのです。
だから、ご法話のお取り次ぎを通して、ご門徒の皆さん

と共にお念仏をよろこぶ同朋でありたいのです。
南無阿弥陀仏とお念仏申し、お聴聞を重ねてい
く中で、「お付き合い」が転じられ、「生きるより
どころ」としての仏教、お念仏を大切にしていけ
たらありがたいですね。

